

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors

タイトル：「アフリカに関する史的研究所と資料」

日時：平成26年11月29日（土）午後2時より6時30分

場所：東京外国語大学本郷サテライト5階

辻明日香（東京大学東洋文化研究所／日本学術振興会特別研究員 PD）

「カスル・イブリーム遺跡出土資料とその可能性：北東アフリカ史研究のための資料群の一例として」

本発表では、北東アフリカ史研究のための資料群の一例として、下ヌビアのカスル・イブリーム遺跡（現在はエジプトのナセル湖に浮かぶ島の一つ）から出土した文字資料について紹介した。カスル・イブリームは紀元前2000年代半ばから19世紀初頭まで、継続して人が居住していたことが確認できる遺跡であり、8世紀頃から19世紀初頭まで、様々な時代の文字資料が出土している。報告では、これら資料の種類・量・内容・特徴等について、時代別に検討した。質疑応答の際には、言語と社会集団との関係、文字が記されたマテリアルやその入手方法、すなわち物質的条件に規定された資料の性格、他地域の状況との比較などについて議論がなされた。

石川博樹（AA 研所員）

「北部エチオピアにおける歴史叙述の種別とその特質」

北部エチオピアは、サハラ以南アフリカでは例外的に紀元前から現地住民により文字記録が残されてきた地域である。本発表では、まず北部エチオピアで成立したエチオピア文字とその使用の歴史、ソロモン朝期（1270-1855年）の歴史叙述の種別を解説した。さらにソロモン朝期の歴史叙述の特質について、エチオピア文字で記されたゲエズ語による歴史叙述の記述を分析することにより検討した。その結果、ソロモン朝期の歴史叙述を執筆していた当時の知識人たちがキリスト教護教的観念に縛られ、それが歴史叙述の在り方に影響をもたらしていたこと、北部エチオピアの知識人たちがエジプトのコプト教会の文献に依拠する一方で、コプト教会とは異なる独自の世界史観を有していたことなどが判明した。

最後に北部エチオピアの文字文化をめぐる未解明の問題を検討するにあたって、コプト教会の北部エチオピアのキリスト教文化への影響を詳細に検討する必要があることを指摘した。